

下野国府跡出土「陳廷莊」銘木簡についての覚書  
—百済王俊哲との関係検討を中心に—

いけ だ とし ひろ  
池 田 敏 宏



## 下野国府跡出土「陳廷莊」銘木簡についての覚書

—百済王俊哲との関係検討を中心に—

池田敏宏

- |                             |                      |
|-----------------------------|----------------------|
| 1 はじめに—下野国府跡出土「陳廷莊」銘木簡について— | 4 百済王俊哲とは何者か         |
| 2 「陳廷莊」銘木の出土遺構              | 5 収束—「貧外史生陳廷莊」とは何者か— |
| 3 延暦九～十年の下野国の動静             |                      |

本稿は、冒頭で下野国府跡出土「陳廷莊」銘木簡（№4140 木簡）本体と出土遺構の概要（土坑の埋没は延暦10年（791）7月以降と考えられている）をふれたのち、延暦九～十年（790～791）頃の『続日本紀』記載下野国記事を整理する。その上で「貧外史生陳廷莊」の考課と評定者（当該期の下野守）の関係考察を行った。その結果、「百済王俊哲以前に陳廷莊が下野に赴任」するケース、「百済王俊哲と共に陳廷莊が下野に赴任」するケースの2つが想定できることを提示した。

## 1 はじめに—下野国府跡出土「陳廷莊」銘木簡について—

筆者は、平成27年度担当職務の一つとして、埋蔵文化財センター常設展示室設置に携わる機会を得た<sup>①</sup>。そして「飛鳥・奈良・平安時代」展示部門の準備（資料調べ、解説パネル作成等）を進めるなかで、下野国府跡出土木簡№4140（本稿では「陳廷莊」銘木簡と呼称する）に関わる事々に気付き、関心をもった。本稿は、それを整理・検討し直した覚書である。

まず、はじめに、「陳廷莊」銘木簡の概要を記す。木簡は、上端は割損し、下端も腐食しているものの、残存最大長は214mm、幅29mm、厚さ4mmほどである。板目の木取りに「(去)上 貧外史生陳廷莊」と墨書されている（田熊ほか1987, 102頁）（第1図）。

## 2 「陳廷莊」銘木簡の出土遺構

次に、「陳廷莊」銘木簡が出土した遺構＝土坑SK-023の概要を記す。第一に、土坑本体について整理する。SK-023は下野国府跡第18次調査区<sup>②</sup>のほぼ中央に位置する隅丸方形の土坑である。規模は長軸が2.6m、短軸が2.3m、深さが0.5mほどである。埋土は、「土坑使用時の堆積土（下位から灰褐色土、灰色粘質土、下層 黒色土＝多量の木簡削屑を含む）とSK-023を埋めた土（上層 暗褐色土・下面より漆紙文書が出土）」に分層される（田熊ほか1987, 19頁）（第2・3図）。

第二に、土坑SK-023の年代的位置付けを記す。まずは土層堆積について整理する。上記したようにSK-023の最上層は土坑放棄時の埋め戻し土（暗褐色土）であるが、報告書によれば、SK-023最上層（暗褐色土）の上に、さらにⅡ期政庁焼失後の整地土層（Ⅲ層）が覆っていたことが記されている<sup>③</sup>。次に共同遺物について整理する。本土坑SK-023からは「陳廷莊」銘木簡以外にも多量の木簡片が出土<sup>④</sup>している。とりわけ「延暦九年」「延暦十年□」「延暦十年七月」「延暦十年七月卅□」など年紀の認められる木簡片が複数点出土していることから、「土坑の埋没は延暦10年（791）7月以降」と考えられている（田熊ほか1987, 162頁）。

では、延暦九～十年の下野国は、どのような状態にあったのであろうか。次節では、文献資料をもとに、その動静を記述してみたい。

### 3 延暦九～十年の下野国の動静

初めに、延暦九年(790)の下野国に係る『続日本紀』記事を整理してみると、蝦夷征討のため東海道駿河以東、東山道信濃以東の諸国に命じて革の甲二千領を作らせた(国ごとに数の割り当てがあり、三年以内にそれぞれの国に作り終わらせることを命じた)記事(閏三月四日条)、東海道相模以東、東山道上野以東の諸国に糧14万石を準備させた記事(閏三月乙未条)、坂東諸国は軍役に課せられたうえ、疾病と旱魃の害を受けたので今年の田租を免じる記事(十一月己丑条)が掲載されるのみであった<sup>99</sup>。

一方、聖・延暦十年(791)の『続日本紀』記事を見てみると、

「遣正五位上百済王俊哲 従五位下坂上大宿細田村麻呂於東海道、従五位下藤原朝臣眞鷲於東山道、簡間軍士、兼檢戎具。為征蝦夷也」(正月己卯条)

と記されている。加えて、正月癸未条は

「正五位上百済王俊哲為下野守」

という記事を、さらには、

「従四位下大伴宿禰弟麻呂為征夷大使。正五位上百済王俊哲 従五位上多治比真人兵成 従五位下坂上大宿細田村麻呂 従五位下巨勢朝臣野足並為副使」(七月壬申条)

という記事や、

「下野守正五位上百済王俊哲為兼陸奥鎮守將軍」(九月庚辰条)

といった記事を、立て続けに見ることができる<sup>100</sup>。しかも、百済王俊哲の下野守在任時期とSK-023出土木簡群(「陳延廷」銘木簡含む)の年代観に重複が認められるのは非常に興味深い(「V取東」で詳論)。

### 4 百済王俊哲とは何者か

ところで、百済王俊哲とは、どういった人物なのであろうか。本節では、その経歴・事績について見てみたい。

百済王俊哲は、「くだらのこにきし しゅんでつ」と読む。その名が示すとおり、亡命百済王家の後裔<sup>101</sup>である。また、それと同時に、八世紀後半代、東北経営に活躍した律令政府官人の一人でもある。「宝龜六年(775)十一月、大伴宿禰駿河麻呂らによる蝦夷征討に参加し、勳六等を授けられた。時に従六位上。同九年六月にも、征戦に功があり勳五等を授けられた。同十一年三月、正六位上から従五位下に、さらに四月には従五位上に昇叙」している(坂本・平野ほか監修1990,264頁)。宝龜十一年(780)六月、伊治常麻呂の乱に際し陸奥鎮守副將軍に任ぜられ苦戦を征した<sup>102</sup>。その功により天応元年(781)九月、正五位上勳四等を授けられた<sup>103</sup>。

しかし延暦六年(787)閏五月、「陸奥鎮守將軍正五位上百済王俊哲坐事左降日向權介」とあり<sup>104</sup>、「何らかの事件に坐して日向權介に左遷された」ことが知られる(坂本・平野ほか監修1990,264頁)。

それでも三年後の延暦九(790)年三月、「日向權介正五位上勳四等百済王俊哲免其罪令入京」と、罪を免ぜられて京に戻っている[免罪の背景には「彼の武官としての才が惜しまれたことと、その前月百済王氏を外戚とする詔が出され、同氏に対する礼遇が高められたことにある」(国史大辞典編集委員会1983,807頁)]。ゆえ、これ以降は、「桓武天皇のいわゆる第二次蝦夷征討に参加せしめられ、延暦十年正月、蝦夷征討の兵士・

武器を観閲するため東海道に遣わされたのち、同月、下野守を、同年九月、下野守と陸奥鎮守将軍の兼任を命じられている（国史大辞典編集委員会 1983, 807 頁、ならび上記「3 延暦九～十年の下野国の動静」参照）。なお、俊哲は、延暦十四年八月辛未に没していることから<sup>111</sup>、延暦十年（791）～同十四年（795）八月に至るまでの四年間、下野守と陸奥鎮守将軍を兼任していたことがわかる。

## 5 収束—「員外史生陳廷莊」とは何者か—

最後に、「陳廷莊」銘木簡について検討を加える。第一に、「史生」とは、「中央・地方の諸官司に置かれた下級書記的な職員」を指す（国史大辞典編集委員会 1985, 776 頁）。なお、上国（＝下野国含む）には「史生三名」を置くことが「職員令第二」（『養老令』以下、省略）に定められている（井上ほか 1994, 193 頁）。第二に、「員外」であるが、これは「員」の異字体と考えられている<sup>112</sup>。すなわち「員外」の「史生」とは「職員令」員数外職員＝雑任として増補された書記官を示している。なお史生は、「諸官司の事務量が增大するにつれて増員され」ることが往々あったという（国史大辞典編集委員会 1985, 776 頁）。たしかに、延暦九～十年頃の下野国は蝦夷征討準備で業務は増大傾向にあり、令制定員「三名」の史生では間に合わなかったと推定される。

第三に、「陳廷莊」<sup>113</sup>であるが、これは人名と考えられている。しかも、音読みで「ちんていしょう」となることから渡来系人物の可能性が高い<sup>114</sup>。

第四に、これらの字句冒頭に「去上」とあることから、本木簡は「員外史生」「陳廷莊」＝（下野国の）非常勤書記官である陳廷莊に関わる考課（官人の勤務評定）木簡であることが分かる<sup>115</sup>。なお「員外史生」は、「考課令第十四」「内分番」の規程に基づき、上、中、下の三等に評価された（国史大辞典編集委員会 1985, 776 頁、井上ほか 1994, 291 頁）。つまり、彼の前年度（＝「去」）の評価は「上」だったことを示している。

第五に、考課の対象期間であるが、「前年八月一日～当年七月三十日を一年度と」して年ごとに勤務評価をつけている（井上 1994, 283 頁上段注）。つまり、「陳廷莊」銘木簡の「去」とは「延暦八年八月一日から翌・九年七月三十日まで」の評定だったことが本木簡出土土坑 S K -023 の年代観から明らかとなる〔上述したように、土坑は延暦 10 年（791）7 月以降の埋没と考えられている〕。なお、吉原氏によれば、本来ならば、この左側に今年度＝「延暦九年八月一日から翌・十年七月三十日まで」の評定が下野国司によって書かれていなければならないところ見当たらないという。今年度評価が書き加えられる前に破損して捨てられたのであろう（吉原 2015, 70 頁）。

第六に、「員外史生陳廷莊」の考課と評定者（下野国司）との関係である。「陳廷莊」銘木簡の「去」時期＝「延暦八年八月一日から翌・九年七月末日まで」は、下野守不在期〔延暦八年五月から九月〕<sup>116</sup>、安倍朝臣第当〔延暦八年五月～〕<sup>117</sup>の下野守任期が該当する。また、今年度＝「延暦九年八月一日から翌・十年七月末日まで」は、安倍朝臣第当（～延暦九年十二月頃まで）、百済王俊哲（延暦十年正月～）の下野守任期が該当する。

## 【結】

以上をふまえると、「員外史生陳廷莊」の下野国赴任は、大きく次の 2 ケースが想定できよう。

### ケース 1 百済王俊哲以前に陳廷莊が下野に赴任

「諸国史生は、国司四等官とともに中央から派遣され」という原則（国史大辞典編集委員会 1985, 776 頁）がある一方、上記したように延暦 8～10 年にかけて下野守は目まぐるしく交替する。しかも、①延暦

八年九月辛亥条で下野守兼任を命じられた「左少弁従五位上安部朝臣弟当」<sup>100</sup>と、同年十二月丙申条で高野新笠の山楼造営を命じられた「左少弁従五位上阿部朝臣弟当」<sup>101</sup>は同一人物と考えられる。また、このことから、この3ヶ月余、安部弟当は在京のままであった可能性が濃い。②加えて安部弟当の前任、佐伯宿禰葛城（征東副将軍・民部少輔・下野守兼任で従五位下・勲八等）も延暦7年12月に蝦夷征討のため出兵、翌・8年5月、出征中に死去している<sup>102</sup>。①と併せて、長らく下野国に下野守が不在であったことがわかる。これらをふまえると、③ (a) 延暦6年以降、佐伯葛城とともに派遣されて以来、延暦10年7月末まで「員外史生」として「陳延莊」が下野に在任し「去年」「今年」の考課がなされた場合、または、(b) 延暦8～9年頃、安部弟当とともに派遣されて以来、延暦10年7月末まで「員外史生」として「陳延莊」が下野に在任し「去年」「今年」の考課がなされた場合を想定することもできよう。なお、この場合、次官である下野介が評定者として関わった可能性が考えられる〔とくに安倍弟当は、短期間しか、下野守として在任していないこと、「考課令」規程を考慮<sup>103</sup>〕。

## ケース2 百済王俊哲と共に陳延莊が下野に赴任

「陳延莊」の今年度＝「延暦九年八月一日から翌・十年七月末日まで」の考課者は、下野守である百済王俊哲であり（ただし、今年度評価が書き加えられる前に本木簡が破損し捨てられた可能性はある）、二人は延暦10年7月末に併在していたことは間違いない。

なお、①百済王氏一族は、8世紀中葉以来、東国・東北地方経営にたけており、その配下に渡来系（知識・技能）集団が存在したことが知られている<sup>104</sup>。②加えて、「陳延莊」自身、渡来系人物と考えられることをふまえると、延暦10年以前から、百済王俊哲が率いる渡来系（知識・技能）集団の一員であったとしても問題はなかろう。③また、この仮定にたてば (a) 「去」時期＝「延暦八年八月一日から翌・九年七月末日まで」、および (b) 今年度＝「延暦九年八月一日から翌・十年七月末日まで」の「陳延莊」考課者が百済王俊哲で一環することになる。筆者としては、こちらのケースのほうが妥当性があるよう思っている。

以上、「陳延莊」木簡と延暦8～10年頃の下野国司との関係について基礎的検討を試みてみた。なお、本検討内容と趣を異にするため本文中ではふれなかった百済王教俊<sup>105</sup>も、平安時代初頭の下野国を考えていくうえで重要な存在であることを改めて認識することが出来た。今後の検討課題としたい。

謝辞 「陳延莊」銘木簡の解釈（考課制度含む）について吉原 啓氏から多々御教示を賜ることができた。また、原 京子氏、内藤 亮氏からは百済王氏関連文書の御教示を頂いた。さらに、本稿作成の途上、津野 仁、永井智哉、佐野良平、坂田敏行、中村岳彦、大竹弘高、齋藤達也の各氏から御助言・御協力を頂いた。末尾ながら記して感謝の意を表したい。

## 注

- (1) 当埋蔵文化財センターが長年蓄積してきた調査・研究成果を、県民の皆様幅広く活用して頂くことを目的に、2015年11月1日より常設展示室を開設した。展示は、考古学の調査方法（遺物の新旧が、どのようにして分かるか等）を説明したのち、旧石器～平安時代までの本県の歴史、人々の暮らしなどを出土品などからわかりやすく展示・解説している。このうち、筆者は、「飛鳥・奈良・平安時代」の展示部門を担当している。
- (2) 下野国府第18次調査区は、国府政庁（第6次調査区）の西隣に位置し、昭和57年度（1982年度）に発掘調査が

- 実施された（田熊ほか1984・1987）。
- (3) 「紀年銘木簡と出土遺構との関連より大別した国府内の遺構区分（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期）の年代を考えれば、Ⅰ期は八世紀前半代に機能していたことが明らかである。Ⅱ期は政庁が焼失しており、この際の整地土が第十八次調査区（SK-011・023等）を覆っていた。このことからⅡ期の終末は、延暦十年（791）七月以降頃とすることができる」（田熊ほか1987, 162頁）。なお、Ⅲ期はそれ以後＝「延暦十年頃～九世紀代」である（田熊ほか1987, 8頁）。
- (4) 本土坑SK-023からは「陳延任」銘木簡以外にも人名が記された木簡（例、「[雀] 部黒須 [三]」「大伴部□」）や、地名が記された木簡（例、「都賀□」「寒川□」）、税物内容などが記された木簡（例、「□九百斛」「年租穀□」）等が多量に出土している（田熊ほか1987）。
- (5) 延暦九年（790）の下野国記事は、青木ほか1998, 460～483頁を参照のうえ、現代語大意を本文に記した。
- (6) 延暦十年（791）の下野国記事は、青木ほか1998, 488～510頁の原文（漢文）を引用した。なお、これらのほかに、東海・東山二道の諸国に征矢三万四千五百余具を作らせた記事（『続日本紀』延暦十年十月壬子条、青木ほか1998, 511頁）、坂東諸国に輸十二万石を準備させた記事（『続日本紀』延暦十年十一月己未条、青木ほか1998, 511頁）も存在する。
- (7) 善光（亡命百済国王子）を祖とする一族（この「王」姓は音読せず「コキシ」「コニキシ」と朝鮮風に訓じられた）。持統朝以降、百済王氏一族は、朝廷の殊遇をこうわり、高位高官に昇る者が数多い。なお、「百済」姓を称する氏族にして、百済王某々の子孫と唱するものは数多いが、真に王族としての礼遇をうけていたものは「百済王」氏に限られるといつてよい（国史大辞典編集委員会1983, 806頁）。
- (8) 青木ほか1998, 208～209頁を参照。
- (9) 青木ほか1998, 208～209頁を参照。
- (10) 青木ほか1998, 386～387頁を参照。
- (11) 『日本紀略』延暦十四年八月辛未条記事（栃木県史編さん委員会1974, 152頁）を参照
- (12) 田熊1987, 102頁および吉原2015, 70頁の見解による。
- (13) 実際の木簡を見ると、「陳延任」の「延」字を「延」と読むか「延」と読むか意見が分かれることがある。しかし、本稿では報告書積文（田熊1987, 102頁）や吉原 啓氏の御教示にもとづき「延」と読むこととした。
- (14) 「陳延任」は渡来系人物の可能性が囁かれて久しいもの、それを明文化したものは少ない（管見に及ぶかぎりでは、「陳延任」＝渡来人を明文化したのは、栃木県立博物館・（財）栃木県文化振興事業団1998, 56頁くらいであろうか）
- (15) 田熊1987, 102頁、および吉原2015, 70頁の見解による。
- (16) 延暦六年二月庚申条で佐伯宿禰葛城は陸奥介と鎮守副将軍の兼任を命じられる。この直後の同月庚辰条では下野守兼任を命じられている。さらに同年十月癸卯日条で彼は民部少輔をも兼任を命じられた（青木ほか1998, 380～393頁を参照）。その後、延暦七年三月己巳日、佐伯宿禰葛城は多治比浜成・紀真人・入間広成とともに征東朝使に任じられた後（同, 400～401頁）、十二月に紀朝臣古佐美を征夷代将軍として出兵（同, 414～415頁）、翌・八年五月、出征中に死去している（同, 428～429頁）。つまり延暦8年12月出征～5月死去、ならびに後任の安倍弟当の着任まで下野国には下野守不在時期があることになる。
- (17) 安部朝臣弟当は、延暦八年（789）九月辛亥条に「左少弁・従五位上安部朝臣弟当為兼下野守」とあるものの同年十二月丙申条には前日に崩御した高野新笠の山作司（山陵を造る司）を命じられており、この期間に、任地の下野国に赴いている可能性は低い。翌・延暦九年閏三月三十日、すべての官人は喪服を脱いで、大祓をおこなっていることから、安部朝臣弟当が下野守として実際に下野国に赴任したのは大祓後の延暦9年（790）4月以降のことと推定される。なお、異動記事はないものの百済王俊哲が下野守となる以前＝延暦9年12月までが安部弟当の下野守任期であったと想定される。

- (18) 青木ほか 1998, 442～443頁を参照。
- (19) 青木ほか 1998, 450～451頁を参照。
- (20) 青木ほか 1998, 428～429頁を参照。
- (21) 「考課令」は「凡内外文武官初位以上、毎年当司长官、考其属官(略)無長官次官考」と評定者を定めている(井上ほか1994, 283頁)。余談であるが、この頃に赴任していた下野介・掾・目の記録は現存史料には無い。
- (22) 今井 1965, 大塚 1984, 利光・上野 1987, 榊原 1995, 小宮山 2010, 山下 2011 を参照のうえ記述した。
- (23) 延暦 18 年 (799) 9 月辛亥条、「從五位下百済王教俊為下野介」(『日本後紀』) など幾つかの記事を見て取れる。これらについては、別稿での検討を考えている。

#### 引用・参考文献

- 青木和夫ほか校注 1998『新日本古典文学大系 16 続日本紀』第五巻、岩波書店
- 井上光貞ほか校注 1994『日本思想大系新装版 律令』岩波書店
- 今井啓一 1965「一 百済王教福とその周縁」「二 百済王氏と蝦夷経営」『百済王教福』綜芸舎
- 大塚徳郎 1984「第一章 古代みちのくに来た都人(一)」『みちのくの古代史—都人と現地人—』刀水書房
- 国史大辞典編集委員会編 1984『国史大辞典』第4巻(き〜く)、吉川弘文館
- 国史大辞典編集委員会編 1985『国史大辞典』第6巻(こま〜しと)、吉川弘文館
- 小宮山嘉 2010「長岡・平安遷都と百済王氏」『東アジア海をめぐる交流の歴史的展開』鐘江宏之・鶴間和幸編、東方書店
- 榊原聖子 1995「帰化人の研究—特に百済王氏を中心として—」『皇學館論叢』第28巻第3号、皇學館大学人文学会
- 坂本太郎・平野邦雄監修 1990『日本古代氏族人名辞典』吉川弘文館
- 三松みよ子 2002「百済王氏没落についての考察」『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』藤澤一夫先生卒寿記念論文集刊行会編、真福社
- 田熊清彦ほか 1983『下野国府跡Ⅴ 昭和57年度発掘調査概報』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 田熊清彦ほか 1987『下野国府跡Ⅵ 木簡・漆紙文書調査報告』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 利光三津夫・上野利三 1987「律令制下の百済王氏」『法史学の諸問題』利光三津夫編、慶應通信(のち上野利三2002『前近代日本の法と政治—第馬台国及び律令制の研究—』北樹出版に再録)
- 栃木県立博物館・(財)栃木県文化振興事業団 1998『発掘された日本列島 地域展示 栃木をひらく / 開堂と埋蔵文化財』
- 山下剛司 2011「百済王氏の東北補任」『鷹陵史学』第37号、鷹陵史学会(佛教大学)
- 吉原 敬 2015「第二章 那須における律令制度の展開 III 古代官人の世界をのぞく」『第23回特別展 那須官衙の時代—律令期地域社会の移り変わり—』大田原市なす風土記の丘資料館湯津上資料館・栃木県那珂川町なす風土記の丘資料館



三  
七  
四  
一  
四  
〇

□<sup>去</sup>上

貞外史生陳廷莊

。上端は割損し、下端は腐蝕している。「去上」とあるから旧  
年の評価が記されたものか。考課に関わる木簡か。

二五箱 下層 板目

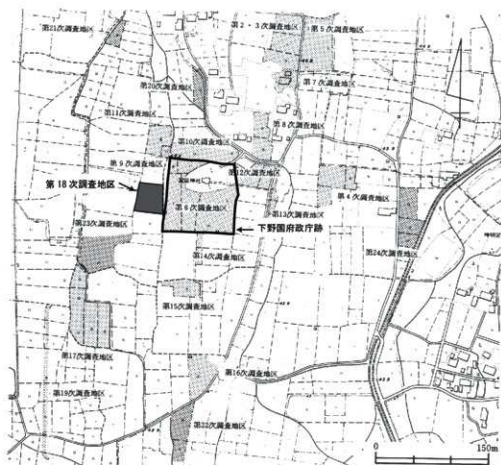


(裏)



(表)

第1図 下野国府跡出土「陳廷莊」銘木簡 (田熊ほか1987を改変)

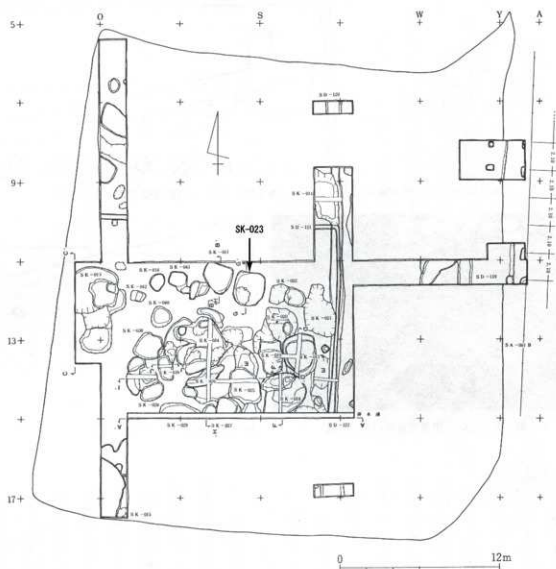


下野国府跡 第2～24次調査区位置図

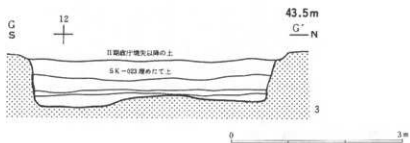


第18次調査区全景（上方の森が政庁）

第2図 下野国府跡第18次調査区位置（田熊ほか1983・1987を改変）



第18次調査区平面実測図



土坑 SK-023 土層断面図

第3図 土坑 SK-023 (田熊ほか1987を改変)

第1表 8世紀後半～9世紀前半の下野国司

	下野国司赴任記事	史料	異動	在任期間	下野国内外の事項
752年	小野朝臣小麿を下野守とする	『統紀』天平勝宝四年十一月乙巳条	明確な異動記事なし	4年か	761年 下野薬師寺が僧侶の受戒道場に定められる 770年 道鏡が下野薬師寺に配流される(772年死去) 780年 伊治公麻呂の乱。多賀城が焼かれる 786年 東海・東山街道の軍団兵士・武器を輸送する 790年 東国諸国に革の甲二千を遣らせる 792年 健甕の制を設ける 797年 坂上田村麻呂を征夷大將軍に任命する 805年 蝦夷征討の中止 814年 藤原上人碑文が空海の筆により完成
761年	石川朝臣名足を下野守とする	『統紀』天平宝字五年正月壬寅条	763年、伊勢守へ転任	2年	
767年	佐伯宿禰三野を下野守に、縣大糞大宿禰内麻呂を介とする	『統紀』神護景雲元年三月己巳条	明確な異動記事なし	4年か	
769年	少納言當麻王を兼下野介とする	『統紀』神護景雲三年六月乙巳条	770年、尾張守へ転任	1年余	
771年	中衛中侍佐伯宿禰伊多智を兼下野守とする	『統紀』宝龜二年閏三月戊子条	明確な異動記事なし	3年か	
774年	大中臣朝臣宿奈麻呂を下野守介とする	『統紀』宝龜五年三月甲辰条	777年、阿波守へ転任	3年弱	
774年	下毛野朝臣根麻呂を下野介とする	『統紀』宝龜五年四月壬辰条	明確な異動記事なし	4年か	
778年	大伴宿禰人足を下野守とする	『統紀』宝龜九年二月辛巳条	明確な異動記事なし	1年余か	
779年	衛門佐(のち中衛少将)大中臣朝臣諸魚を兼下野守とする。久米連真上を介とする	『統紀』宝龜十年九月癸酉条	大中臣諸魚の明確な異動記事なし。久米真上は781年大和介へ転任	2年程	
781年	石川朝臣美奈岐麻呂を下野介とする	『統紀』天応元年四月丙申条	782年、安房守へ転任	1年余	
782年	文室真人高嶋を下野守とする	『統紀』延暦元年閏正月庚子条	明確な異動記事なし	3年か	
同年	伊勢朝臣水浦を下野介とする	『統紀』延暦元年八月乙亥条	785年 内匠頭へ転任	3年弱	
785年	和朝臣国守を下野介とする	『統紀』延暦四年正月辛亥条	787年、参内守へ転任	2年余	
787年	佐伯宿禰長城を除典介兼鎮守副将軍兼下野守とする	『統紀』延暦六年二月庚辰条	789年 出征中に死去	2年余	
789年	左少弁安倍朝臣弟当を兼下野守とする	『統紀』延暦八年九月辛亥条	明確な異動記事なし	1年余か	
791年	百濟王敏智を下野守にする(のち兼陸奥鎮守将軍)	『統紀』延暦十年正月己卯条	795年 死去(在任中か)	4年余	
796年	巨勢野足を下野守とする	『後紀』延暦十五年十月甲申条	明確な異動記事なし	3年弱か	
799年	近衛少将大伴宿禰是成を兼下野守に、百濟王敏俊を介とする	『後紀』延暦十八年九月辛亥条	明確な異動記事なし	4年余か	
804年	中衛少将巨勢朝臣野足を再び兼下野守に、大中臣朝臣常麻呂を介とする	『後紀』延暦廿三年正月乙未条	明確な異動記事なし	2年か	
806年	藤原友人が下野守に左遷される(伊予親王謀反に連座)	『紀略』大同二年十一月丙申条ならび『類聚国史』	明確な異動記事なし	2年か	
808年	式部大輔賀爾朝臣豊年を兼下野守とする	『後紀』大同三年五月乙未条	810年 播磨守に転任	1年余	
同年	安部朝臣清継を下野介とする	『後紀』大同三年十一月甲辰条	明確な異動記事なし	4年か	
809年	百濟王敏俊を下野守にする	『後紀』大同四年正月癸巳条	明確な異動記事なし	4年か	
810年	右近衛少将朝臣百継を兼下野守とする	『後紀』弘仁元年九月丁未条	明確な異動記事なし	1年余か	
812年	藤原朝臣道継を下野守に、安部朝臣豊橋を介とする	『後紀』弘仁三年正月辛未条	明確な異動記事なし	2年か	
814年	左少将朝野鹿取を兼下野守とする	『公卿補任』弘仁五年十一月	明確な異動記事なし	1年か	
815年	右兵衛督春原五百枝を兼下野守とする	『後紀』弘仁六年正月丙戌条	明確な異動記事なし	不明	
823年	藤原常嗣を下野守とするが赴任せず	『続後紀』承和七年四月戊辰条幸伝(弘仁十四年記事)	春宮亮に留任	赴任なし	
825年	参議橘常主を兼下野守とする	『公卿補任』天長二年十月廿七日条	826年 死去	1年弱	

---

---

研究紀要 第24号

発行 公益財団法人とちぎ未来づくり財団  
埋蔵文化財センター

〒329-0418

栃木県下野市紫 474 番地

TEL 0285 (44) 8441 (代表)

FAX 0285 (43) 1972

HP : <http://www.maibun.or.jp>

発行日 平成28年3月29日発行

印刷 下野印刷株式会社

---

---